

保育の専門性・

保育の協力性

津守 真

—— 保育の専門性 ——

私は、いま、毎月同じ子どもたちと交わることの面白
さと、それに伴う緊張を日々感じさせられている。

前号に記した五歳のA子は、今年の正月から発作が頻
繁で、三学期の最初の日から、学校にきても眠っている
ことが多かった。目を覚ましたときには、意志のひらめ

きをみせても、じきに眠りこんでしまう。二週間ほどこ
ういう日々がつづく間に、私も親も、こういう身体状況
にありながら、本人も周囲の人もできるだけ快く毎日を
過すのにはどうしたらよいかを本気に考えはじめてい
た。

ある日、母親が、薬の量を減らしてもいいのではないかと医者にご相談したら、医者も同意したのでと報告してくれた。発作がひどくなると、母親はその現象に衝撃をうけて、何とかしてくれと医者に訴え、医者もそれに応えようとして、薬の分量が次第に増えることになる。わたしの態度の方が最初なんです、と母親は明るく笑った。

A子のようなすをみていると、動きも鈍く、表情も不快そうで、何かをしても途中で眠ってしまうのは、発作のせいなのかいづれかよくわからない。発作がひどくなる身体状況が先にあつたので薬の量が増したわけだが、結果の行動にはその両者が影響しているのだろう。発作が起っていないときには機嫌よくたのしく過ごせればいいのだが、この二週間ほどをみていると、その点が疑問に思えた。

それから更に二週間たった。発作もおさまり、学校でもA子はほとんど眠ることなく、次第に元気な声をあげ、ボールをころがして私とやりとりをし、一日活発に

動くようになっていった。機嫌の良い子どもにもどったといえるようなその様子をみていると、夜中には発作がしばしばあるとのことだが、これでよいのだと思える。

ちょうど発作がおさまる時期だったのかもしれないし、また、それにあわせて薬の量が減じたためなのかもしれないが、いま私はその因果関係や功罪を論じようとしているのではない。医学の専門的観点はそれとして尊重されねばならないし、同様に、子どもの毎日の生活をみる保育の観点も専門として重視されねばならぬことを、私は述べているのである。

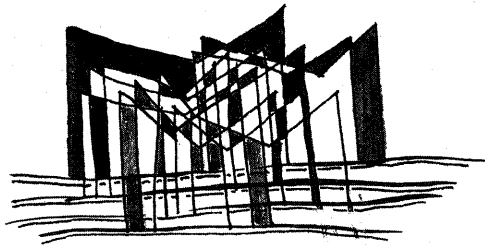
この場合には、生活の中での母親の判断を、医者は尊重した。日常の状況にもとづいた見識だったので、説得力もあつたのだろう。しかし、薬の量を減じたらとり返しのつかない悪いことが起るといふように、医者が専門性の権威を主張したならば、母親は自分の判断に不安をもち、動揺するだろう。分化した専門科学や、制度に支えられた専門が力をもつ現代においてはこういうことが起りやすい。毎日の生活の全体を、生きた力動的なもの

としてゆく保育の仕事が、単なる雑事とみなされ、それ自体の専門性が見失われる傾向にある。母親が保育の意味を自覚せず、自らのエネルギーをそこに注ごうとしない。保育者が自らの保育を他の専門に従属させて、生きた生活をつくり上げるといふ高度の専門性を認識しない。このことが、現代の生活を一層不安定なものとし、落ち着きと明るさを失わさせているのではないかと思う。

保育は、相手が自らのアイデンティティをつくり上げるのを助ける仕事である。保育者とは、それを引き受けることに自らの人生の意味を見出す者のことである。日々の保育の生活は、どこにそのような重要な意味があるのかもわからないような、小さなことの連続である。しかし、よく見ると、そこには、日々、異なった状況がある。その状況をどのように読みとり行為するかは、保育者に与えられた高度の専門的課題である。

私どもの生活は、身体的にも、社会的にも、ほとんど運命的ともいえるような、人の力によって変えることの

できない条件のもとにある。その制約の中で、日々を快く、それぞれが生きる意味を見出せるように、生きた生活をつくるのは、保育の力である。



保育に携っていると、ひとりの人はひとりの分しかなし得ないことがよくわかる。自分の力の及ばないところは、他の人にゆだねなければならない。他の人が子どもと交わるときには、同じ子どもでも、私が交わったときとは異った状況を展開するのだが、そこには共通の人間理解があり、他人もその子どもとの間に生きた関係をつくることを、信頼してゆだねる。同時に、他人には私と違った感受性、力量、見方があるから、子どもは異った人々と接することにより、違った面がひき出される。このことは保育をしているとよくわかる。

ひとりの人が、ひとり分以上の力を持つとうとすると、保育に無理が生じる。マイクで遠隔操作をして多数の保育者を動かすことなど、考えただけでも滑稽である。あるいは、科学的につくられた方式を応用することが保育であるとする考えは、人間的関係を無視するものであ

る。

力動的な保育の実際では、ある時間だけを見ると、ひとりの大人がひとりの子どもと対していることがしばしばある。ひとりの子どもとの時間が深められないで、大人が常に全体に注意を散らしていたら、その保育は浅薄なものになるだろう。しかし、一日を通してみるならば、ひとりの子どもはいろいろの大人や子どもとふれている。この点が閉じた関係のセラピーと開かれた関係の保育との相違点であろう。保育においては、同じ保育の場に何人も人がかかわるので、保育者同士の信頼的協力がなくては保育はなしえられない。

ある朝、三歳のMくんがO先生の手をひいて二階にゆく階段を昇るのを私は見ていた。そのあとSくんが門から入ってくるのを私は出迎えた。私はSくんを追って校

長室にいったが、彼は私の机の上から眼鏡をとると、O先生をさがしに二階にいった。私は何度も眼鏡をかけさせられて相手をしたことがあるが、彼は一緒に過そうとする大人に眼鏡をかけさせるのである。(最近亡くなったSくんの父親は眼鏡をかけていた) SくんはO先生を見つけるとその手をひいて階下へと去ったので、私は、はからずもMくんと遊ぶことになった。Mくんは行きかう大きい子どもたちの間をぬうように歩きまわりながら、いろいろの物に手をふれることを楽しんでた。この日、彼は歩きまわりながら音のざわめきを聴覚で触っているように思えて、私はその感覚を想像しながらMくんと一緒に歩き回った。手には青い透명한レゴの薄片を持っている。昼ごろから別の実習生がMくんをみるようになった。あとで話をきくとピアノを弾いて過したという。私とだったら展開しなかったであろう場面である。

Sくんも午后からはO先生と代って私とトランポリン

をとび、私は私なりにふざけたり、気持をかわすことを楽しんだ。数人の子どもたちがその囲りを女の先生と賑やかに走り回っていた。しばらく後、眼鏡をかけた別の男の先生が通りかかるとSくんはその手をひいた。若い男性とのトランポリンは、Sくんには更に愉快な様子だった。

SくんもMくんも、この日、満ち足りて帰っていった。いずれも私とだけ交わったのだったら、これほどに充実した生活とはならなかったろう。何人かの大人たちが、状況に応じて行為し、ある時、互いの信頼のもとに子どもを相手にゆだねる。それぞれがおかれた場所出会った子どもと精一杯に取り組み、それがつながって、どの子どももその一日を自分のものとして生きることができる。

保育の実際は、保育者同士の信頼的協力関係によって成り立つ。それは、それぞれが、自分と対等の人間として相手と向き合うことを基本とする関係である。その人同士が協力できるのは、一方には、自分が他者の状況に

おかれたならば同じようになしうる交換可能性をもつからであり、他方には、異った個性をもつ他者が開くであろう未知の可能性を信頼するからである。それらが織り成されて力動的な保育の場となる。

子どもたちの一日の生活の全体を、生命的なものとするところに保育の専門性がある。そのような生活は、ひとりの人だけでつくることはできず、何人かの人々の協力を要する。それぞれが、生活全体を生かす保育の価値

を認識し、その意味を自覚する人であるときに、互いの信頼的協力は生活の場を力動的にする。

同じ場ではたらく保育者同士だけでなく、親も私共と、信頼的協力関係に立つ保育者である。

保育者は、身辺の狭い世界だけに閉じこめられているようにみえても、決して孤立しているのではなく、人間を育てるといふ大きなコミュニティの一員である。

(愛育養護学校)

